

# 表現に即して内容を読み取る力を身に付ける古典授業の改善

－思考過程・思考結果の共有化を通して－

長期研究員 加藤 裕美

## I 研究の趣旨

新学習指導要領は、小学校から一貫して言語文化の指導の充実について言及している。古典は我が国の歴史の中で創造・継承されてきた言語文化そのものであり、人生を豊かにする上でも、古典を読むことには深い意義がある。しかし、自らの授業を振り返ると、文法・語句の指導に偏りがちで、生徒が主体的に学び、古典を読む力を身に付けていたとは言い難い。

そこで、平成25年度より年次進行で実施される新学習指導要領「古典B」に明記された二つの点に注目した。一つは、言語活動例として示された「同じ題材を取り上げた文章や同じ時代の文章などを読み比べ、共通点や相違点などについて説明すること」、もう一つは、内容の取り扱いに示された「古典についての評論文などを用いることができる」である。これらの中に、思考過程・思考結果を共有する活動を取り入れ、表現に即して内容を読み取る力を生徒に身に付けさせたいと考えた。

## II 研究の概要

### 1 研究仮説

古典指導において、以下の(1)～(3)の手立てを講じれば、生徒は表現に即して内容を読み取る力を身に付けることができるであろう。

#### (1) 二つの古典の読み比べ

共通点や相違点を探るという課題意識を持って文章を読むことができるように、同じ題材を取り上げた作品や、同じ時代の作品などを読み比べさせる。この活動により、表現を細部に渡って比較させ、作品への理解を深めさせる。

#### (2) 古典についての評論文の活用

古典を読み比べた後に、古典についての評論文を読むことで、専門家ならではの視点を学ばせ、作品に対する理解を一層深めさせる。

#### (3) 思考過程・思考結果の共有化

以上の(1)(2)を個人で行った後、思考過程・思考結果を共有するためのペア活動やグループ活動に発展させ、自分とは異なる読みを知る契機とさせる。

## 2 研究の内容と実際

これまでの古典の授業が、文法・語句の指導に偏りがちであったとはいえ、これら基本事項の習得を欠かすことはできない。したがって、以下のような「二段階の読み」を行った(図1)。「第一次の読み」では、文法・語句の指導を主として行い、古典作品の概要を把握させた。

「第二次の読み」では、「第一次の読み」で扱った古典作品と、

もう一つの古典作品の読み比べを行わせた後、古典に関する評論文を活用させた。

授業実践は、研究協力校の第3学年77名(2クラス)を対象として行った。

#### (1) 授業実践 I 「能登殿の最期」(『平家物語』)

本単元では『平家物語』に登場する武将の人物像に迫ることをねらいとした。「第一次の読み」では、「能登殿の最期」の文法・新出語句の指導を行い、概要を把握させた。「第二次の読み」では、能登殿と対照的な人物である宗盛を描いた部分との読み比べをグループで行わせた。更に、評論文教材『文車日記』(田辺聖子)を活用し、能登殿と同じく勇猛な武将として描かれる知盛について学ばせた。単元のまとめとして『平家物語』の人物論を書かせた。

#### (2) 授業実践 II 「道長の豪胆」(『大鏡』)

本単元では、「道長の豪胆」が持つ表現の特徴を読み取ることをねらいとした。「第一次の読み」では、

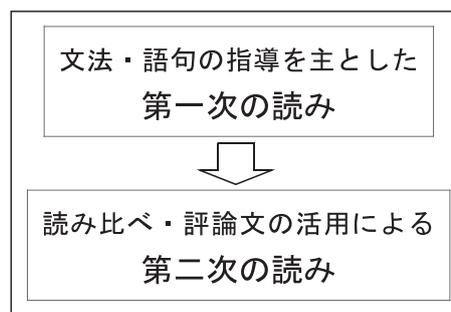


図1 二段階の読み

「道長の豪胆」の文法・新出語句を指導し、概要を把握させた。「第二次の読み」では、『大鏡』と同じ歴史物語でありながら、道長に対する視点が対照的な『栄花物語』との読み比べをペアとグループで行わせた。更に、評論文教材『大鏡の人びと 行動する一族』（渡辺実）を参考資料として活用し、「道長の豪胆」の紹介文を書かせ、単元のまとめとした。

### Ⅲ 研究のまとめ

#### 1 成果

##### (1) 二つの古典の読み比べ

授業実践Ⅱの際、「第一次の読み」終了後と、「第二次の読み」終了後の二度に分けて、生徒に自己評価を書かせた（図2）。

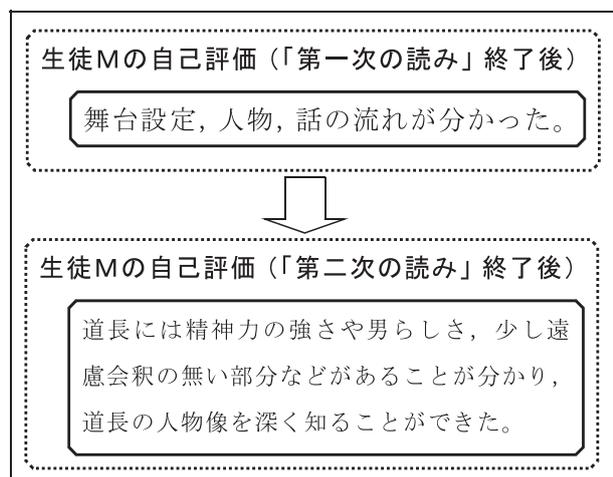


図2 生徒の自己評価の変容

「第二次の読み」を経て、作品への理解が深まったことが、自己評価の記述内容と記述量の増加からうかがえる。また、「二つの古典を比べながら読む活動は、内容理解につながりましたか」というアンケートに、「つながった」と答えた生徒は45%、「どちらかというとなつながった」と答えた生徒は55%であり、対象生徒全員が、読み比べは内容理解につながったと感じている。このことから、読み比べは古典作品への理解を深め、表現に即して内容を読み取る力を身に付ける上で有効であると考えられる。

##### (2) 古典についての評論文の活用

授業実践Ⅱで生徒が書いた紹介文の中には、作品内容の説明にとどまらず、作者の価値観は時代や性別によって変わるという、評論文を読むことで身に

付けた視点で書かれているものもあった。このことから、生徒は評論文の活用によって、古典作品を読む際に役立つ視点を学んだと言える。

##### (3) 思考過程・思考結果の共有化

授業実践Ⅰの授業前と授業後にアンケートを行った（図3）。

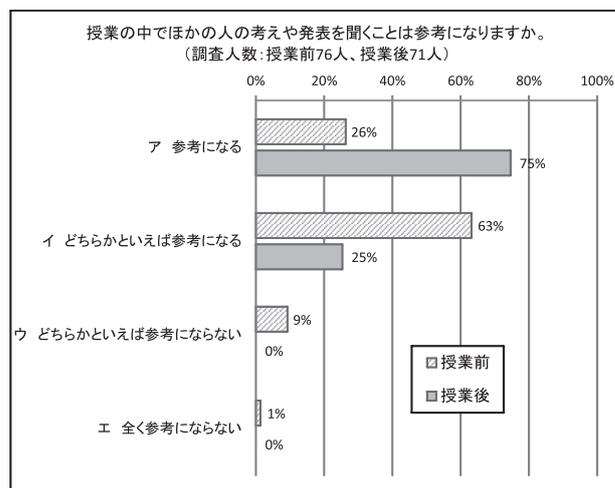


図3 授業前・授業後のアンケート結果

これによると、「授業の中でほかの人の意見を聞くことは参考になる」と答えた生徒は、授業前は26%であったのが、授業後には75%まで増加した。また、「どちらかといえば参考にならない」「参考にならない」と答えた生徒は、授業後には0%となった。このことから、生徒は実際の活動を通して、思考過程・思考結果を共有する意義を実感したことが分かる。また、「いろいろな意見を交換し合えてよかった」「会話をしながら理解を深めていくのが楽しかった」などの記述もあり、思考過程・思考結果の共有化は、生徒の意欲を高める上でも有効であると言える。

#### 2 課題

##### (1) 読み比べ教材の開発

古文と漢文の読み比べや、漢文同士の読み比べなど、読み比べ教材を開発したい。

##### (2) 評論文教材の活用

更なる効果的な評論文教材の活用法について、教材開発と併せて検討したい。

##### (3) 評価の工夫

評価問題作成を含め、読み比べなどの活動を評価する工夫について更に研究したい。